

室町期における奈良福智院地蔵堂の再興と「勸進憑支」

阿諏訪 青美

はじめに

奈良市福智院町に今も残る福智院地蔵堂は、道の辻に面した小さな堂である。創建は天平八年と伝えられ、一九九六年はちょうど創建者玄昉の没後一二五〇年に当たった。^①本尊の地蔵菩薩は寄木造りの座像で、高さは二・七五メートル、実物を前にすると、小さなお堂に地蔵が詰め込まれた様な印象を受ける。^②

ここの地蔵は、古来より有名で、十三世紀後半に成立した『沙石集』は、当時の靈驗あらたかな地蔵として「福智院・十輪院・知足院・市の地蔵」を挙げている。また、『大乘院寺社雜事記』(以下『雜事記』とする)の文明四年(一四七二)九月二十四日条にも、

奈良中、地蔵靈驗之所々者、春日西屋地蔵・勝願院地蔵・知足院地蔵・福智院、

とあり、約二世紀に渡って信仰の対象となっていたことが分かる。

この地蔵は、最初からこの地で造られたものではない。胎内の、建仁三年(一二〇三)六月二十七日日本尊造立の墨書銘と、『雜事記』の文明十年(一一四七八)六月二十四日条、福智院地蔵ハ、自福智庄奉遷当所云々、仍謂福智院云々、から、十三世紀初頭に、福智庄、現在の奈良市狭川で造られた事が分かる。また、腹部には建長六年(一二五四)に造立供養の銘があり、造立から五十年の後、現在の福智院町に移されていた。^③言い伝えによれば、その移築は、西大寺中興の祖、興正菩薩教尊の「勸進」によるという。

文明十年の夏、この地蔵堂の修理が始まり、再び堂のために勸進が行われる。そしてその勸進は堂を見事に修復し、上葺の資金繰りに「憑支」が行われる。

勸進とは、本来衆生を念仏教化し、仏道に結縁すること

を勧める行為を指すが、同時にその方法として、広く一般に資材・金銭・労力を募る言葉でもある。先頭に立つ「勸進聖」等の呼びかけに応じ、人々は自らが差し出せるものを通して、現世来世の安穩と、近親者等の供養を願った。

勸進に関する研究は、大勸進主導と、民間の聖との分類や、律僧の活動、飢饉の際の救済、勸進銭としての税金徴収、相互負担など、各方面から論じられている。勸進としての活動内容は豊富で、猿楽・田楽・平曲等の芸能、札売り、功德風呂など、神仏を名目とすれば勸進となり得た。そして出来るだけ多くの人の参加が求められた所に、特徴がある。

一方、憑支は「タノモシ」と読み、「頼母子・頼支」とも書かれ、また「合力銭・無尽銭」とも呼ばれる。金銭の融通を目的とする一種の「講」で、仲間が定期的に集まり、金を出し合い、籤や入札等の方法で所定の金額を順繰りに手にしていく。「無尽講」とも言い、戦後まで一般的に行われていた。現在は相互銀行・信用金庫・職場の共済組合の中に、その形を止めている。研究には、信仰目的の貯蓄制度と、金融の両面があるが、特に後者では、憑支（相互扶助）と無尽（金融）という、二つの性格の起源・相違・融合が論議され、村落内の領主による収奪手段と目されている^⑩。しかし、中世の都市での憑支の構造は、具体的に論じ

られていない。

福智院地藏堂の憑支は、奈良という都市で行われた、地藏堂の上葺を目的とする「勸進憑支」である。地藏堂の修理に際して行われた勸進活動の一つが、憑支という形態を取っていた。ここでは「勸進憑支」と言う、勸進活動の一つの具体的な姿を浮かび上がらせ、単なる憑支とは違う「勸進憑支」の構造と、それが堂の修理過程の中で、どんな位置を占めていたかを明らかにしていく。

注

(1) 「福智院地藏堂」パンフレット。福智院院主阪井昇道「福智院の由来記―玄昉僧正老千弍百五拾年御遠忌によせて―」一九九六。

(2) 『奈良県史』十七金石文下 奈良県史編集委員会、一九七八。

(3) (2) に同じ。

(4) 中ノ堂一信「中世的「勸進」の形成過程」『中世の権力と民衆』創元社、一九七〇。

(5) 松尾剛次「勸進と破戒の中世史」吉川弘文館、一九九五。

(6) 東島誠「前近代京都における公共負担構造の転換」『歴史学研究』六四九、一九九三。

(7) 古川元也「天正期上京立売について―洛中勸進に関する三点の史料から―」『年報三田中世史研究』二、一九九五。同「天正四年の洛中勸進」『古文書研究』三六、一九九二。

室町期における奈良福智院地藏堂の再興と「勸進憑支」(阿諏訪)

- (8) 釈迦堂光弘「中世後期地域社会における勸進と奉加」『駿台史学』一〇一、一九九七。
- (9) 憑支の基本形態に付いての説明は、安田次郎「にぎわう都市寺院」(『都市の中世』吉川弘文館、一九九二)に詳しい。
- (10) 三浦圭一「中世の頼母子について」『史林』四六一二、一九五九。また森嘉兵衛著作集二『無尽金融史論』(法政大学出版局一九八二)は、近世の憑支に詳しい。

一、福智院地藏堂

1 勸進と信仰

福智院地藏堂の修理は、文明十年(一四七八)七月から二十七年間以上に渡って行われる。『雑事記』の中から、地藏堂の姿を追ってみたい。

地藏堂修理の記事は、まず勸進活動の開始から始まる。文明十年七月六日条、

福智院地藏堂修理自今日始之、地藏六万鉢摺之、十方勸進也、聖六人善久方二仰付之了、

地藏の摺仏六万鉢をすり、十方に勸進として売り歩いている。その要員として、善久という僧に「聖六人」が任された。「仰付」たのは、『雑事記』を記した時の大乘院門跡尊で、初期の地藏堂修理資金は、これらの勸進活動により、賄われていく。

勸進活動に伴って、地藏の靈験が広く説かれた。その結果、文明十一年(一四七九)八月七日条に、

福智院地藏堂ニ参詣了、近日奈良中者共当堂ニ参詣、事外事也、色々利生共在之之由聞之、不思議事、此地蔵之腹内ニ、大明神御作之地蔵奉納之云々、

奈良中の人々が、地藏堂へ押し寄せている記事が見られる。理由は、「色々利生共在之之由聞之」と様々な御利益があるとの噂が立ったためで、同時に、腹内に春日山の大明神が造った地藏が納められているという、話も広められている。後に、他国への勸進の際に作られた勸進帳には、この内容がそのまま書かれている。勸進の際には、人々の信仰を煽る数々の話がでっち上げられていたのだ。また、文明十四年(一四八二)五月七日条からは、

先年福智院地藏ニ如此群集了、其後足輕共乱入、郷内無正体事出来、大ニ不可然事也、凡無力事也、

この大群参の後に、足輕が乱入した事が分かる。恐らく人々が納めた供物を狙った行動で、人々の参詣の規模と奉納された供物や奉伽銭による、地藏堂の収入が推し量られよう。

この後、間隔を開けて五回の勸進が、奈良中・長谷寺辺りで催されている。とくに奈良中では、勸進聖と共に、奈良の地下人が互いに勸進を行っている。勸進の際に語られ

た、地藏菩薩の靈驗に呼応しての参加と考えられる。

では、このように広められた地藏の靈驗に、勸進に対する喜捨、供物の奉納、勸進行為に参加する労働奉仕などを通して、人々はなにを求めたのか。明応六年（一四九七）二月二十六日条、

福智堂（院カ）地藏堂之室之上葺奉伽、（中略）瓦分六十貫代云々、瓦作以半分可沙汰云々、親年季二相当之間如此云々、

後成恩寺殿・小林寺殿・後五大院殿・後蜜乘院殿各年季二相当之間、以御訪分十二貫文可奉伽之由仰之、

前半は、地藏堂の室の上葺に際し、瓦師が瓦代の六十貫を半額で請け負う、とある。理由は「親年季二相当之間」とあり、半額にすることで、親の菩提を弔う事に繋がると瓦師は考えていた。後半は、尋尊の身内の戒名が並び、やはり「各年季二相当之間」と、尋尊も身内の弔い料として、上葺代を奉伽している。

地藏とは、釈迦の入滅後、五十六億七千万年後に、弥勒菩薩がこの世にあらわれるまでの末世の中、人々の救済を任された仏であり、結縁をすることで、特に地獄に落ちた魂を救うと信じられていた。人々が求めたのは、現実的な御利益と共に、地藏による魂の供養であり、福智院地藏堂の勸進活動は、一貫して、このような人々の「追善」「救済」

要求が支えていたのである。^⑤

2 地藏堂の関係者

では、地藏堂の修理は、具体的には、どの様に成されていったのか。

「地藏堂修理」と言っても、修理の対象は堂のみではない。文明十一年（一四七九）二月十九日条には、

坊ハ客所一字 クリ一字

此客所去年上葺自別当申付之、畳八帖今度自門跡渡之、御堂修理ハ横坊沙汰、十方勸進也、

修理が始まった時点では「坊ハ客所一字 クリ一字」とあるように、堂以外にも複数の建物があった。この後には、

福智院堂之北ハタ板出来、同宝殿壇新造之、^⑥

など新たな施設が次々と建てられていく。地藏堂修理とは、堂とそれに付随する諸施設の修理・増築を指していた。

修理に関係した人物は、客所の上葺を申し付けた「別当」、畳八帖を渡した大乗院門跡尋尊、そして十方勸進をした「横坊」、とある。ここに見える「別当」とは、康正元年（一四五五）八月二十日条、

国司息当坊二光臨、十五歳藤千代丸、（追筆）「法名尊誉、大納言、興福寺別当、東林院僧正、号仏地院、震筆八

室町期における奈良福智院地藏堂の再興と「勸進憑支」（阿諏訪）

講丁衆、于時大法師音頭、十九歳ニ得度、

康正三年（一四五七）正月二十六日条、

坊官福智院之跡事、悉以国司之息之料所ニ付了、仍福智院地藏堂別当之間、昨日二十四日修正ノ仏供下行之、代三百文、当坊主請文在之、牛玉又進之、彼坊跡事、奉公仁在之者、雖何時可仰付也、仍且成彼料所了、

とある「東林院尊誉」を指す。文明十二年から十五年までの間、興福寺の別当を勤めた。大乗院領内の地藏堂の敷地は、もともと堂が福智庄から移築されたときに、大慈三昧院、時の門跡慈信の御座所であり、「福智院郷」という町も形成された。慈信の没後も地藏堂は残り、院の敷地は坊地となっていた。その坊地を「料所」として保有した事で、東林院は地藏堂の別当となった。

「横坊」とは、文明七年（一四七五）七月十八日条に、「横坊善久房高野僧也、上北面恵守息也」とある。最初に十方勸進を行った善久は、横坊とも呼ばれ、上北面の出自を持つ。北面とは本来、院門跡を警護する職にある僧だが、この時期には雑務一般を取り仕切る役目を果たしていた。上下に分かれ、尋尊の下には二十五人前後がいた。その善久の弟子には、後に堂修理で活躍する「善秀房」、地藏堂の後継者と定められる「善春」、春辰の弟、同じく上北面の寛円の四男等がいる。別に小姓もいたようだ。

修理開始から四ヵ月後の文明十年（一四七八）十一月十五日、地藏堂の前坊主観舜が入滅する。後任者として、同年十二月二十三日、

横坊善久房福智院地藏堂坊主ニ成之、今日入院了、当堂別当東林院僧正許可可也云々、

「別当東林院」の「許可」により、善久は修理費用集めの勸進のみではなく、正式に地藏堂の管理者に任命される。そして文明十一年（一四九七）正月十一日には、

横坊夜前より福智院ニ居住之由申之、今日部屋雑具共渡之云々、畳八帖分令許可了、

と、堂内に住み始める。「畳八帖今度自門跡渡之」とは、居住スペースとしての八畳を、尋尊が善久に許可した事になる。

福智院地藏堂は、大乗院領内という尋尊の膝元にある、別当東林院の料所で、人事権は東林院が、居住権は尋尊が持っていた。そこで坊主の善久は、地藏堂の管理と修理を、請け負っていく事になった。

3 堂の再興

正式に地藏堂の坊主となった善久は、管理者として、「十方勸進」以外に何をしていったか。堂内に居住し始めた翌

月の文明十一年（一四七九）二月十五日の『雜事記』には、
福智院地蔵堂領田畑以下納帳、数十年分二帖在之所々
沙汰方々ハ、

として、三十七箇所の土地とそこからの収入分が、「以上燈
油仏聖料所」と「以上八講料所」の二つに分けて記載され
ている。

地蔵堂の前坊主である觀舜房は、享徳二年（一四五三）
から文明十年（一四七八）までの二十五年間、『福智院地蔵
堂仏聖納帳』を記している（以下『仏聖納帳』と略す⁸）。こ
の『仏聖納帳』と「以上燈油仏聖料所」分を比較すると、「以
上燈油仏聖料所」十八箇所の内、十四箇所が、『仏聖納帳』
の享徳二年分と符合する。したがって、「田畑以下納帳、数
十年分」の納帳の一部は、先代の觀舜房が記した『仏聖納
帳』にあたる事が分かる。

しかし、尋尊が『雜事記』に記した収入分は、そこから
の実際の収入ではない。『仏聖納帳』の享徳二年分では、総
計三石九升の内、一石二斗二升五合しか納められていない。
下つて帳簿の最後の年、文明十年分も、納められた合計は
一貫二百三十文と、六斗六升にしかない。

觀舜に続いた善久も、『福智院地蔵堂当知行納帳』⁹（以下『当
知行納帳』と略す）という、地蔵堂領からの収納帳を記し
ている。

史苑（第五八卷二号）

この文書は、毎年ごとの記録ではなく、①文明十年、②
文明十六年、③明応八年、④明応九年、⑤文龜元年、⑥文
龜三年の六年分に分けて記され、作成された時期は、『憑支
引付』（後述）の裏に書かれていることから、③段階以降と
推定される。①④までの内容はほぼ一致しており、各々
一年分が「觀舜房代知行分」と「善久より初めて知行する
分」、「十二講地」の三つに分けられている。

「觀舜房代知行分」については、『当知行納帳』の①に、
次のように記されている。

以上二十三箇所田畠、觀舜房請取分（中略）

此地子ハ、四貫二百八十三文□、以上米一石三斗一升

□、

文明十年イヌノトシ十二月二十三日 此分請取申

善久

「文明十年イヌノトシ十二月二十三日」とは、善久が地蔵堂坊
主に就任した当日で、この箇所は、先代の觀舜房からの堂
領の引継ぎを示している。「地子四貫二百八十三文、米一石
三斗一升」は、『仏聖納帳』の分とそれ以外の「以上八講料
所」分等を合わせて、文明十年段階に地蔵堂に納められて
いた額となる。

六年後の②段階になると、新たに「善久より初めて知行
する分」と「十二講地」が加わる。「善久住持ノ時ヨリハシ

室町期における奈良福智院地藏堂の再興と「勸進憑支」(阿諏訪)

メテ知行スルブン事」として、

以上、地子一貫七百七十五文 此地十キレアリ

大乘院殿ヨリ御キシシ 水田一反ツカノモト 地子

一石二斗代

以上、此田畠十一箇所アリ 永代当堂知行ナリ

此地子ヲモツテ、当堂ノ北方ノツリトウヲマイヤト

ホスモノナリ

善久

「以上、此田畠十一箇所アリ」として、新たに十一箇所の田畠が善久の代に堂領となつてゐる。合計は「一貫七百七十五文」、「一石二斗」となり、この数値は若干の変動はあるものの、②④段階を通して変わらない。そして「此地子ヲモツテ」地藏堂の修理費用に当ててゐると、善久は署名をしてゐる。

「十二講地」については、②④段階で、

以上四箇所、ナカコマ地下人十二講ト号シテトル、

文明十六年大乘院殿ヨリ善久ウケタマワリテ再興シテ

トリカエスナリ、料足七百文 米三斗九升 当堂知行

とある。

前述の『仏聖納帳』には、享徳三年(一四五四)と、康正元年(一四五五)、長祿四年(一四六〇)分に、それぞれ後筆で「十二講地子事」とした、四箇所の田畠の書き込

みがある。収入分の合計は三斗と六百文で少ないが、両者

の耕地の場所と収入を比較すると、四箇所中二箇所が場所、地子ともに一致する。『当知行納帳』の「十二講地」とは、

『仏聖納帳』の「十二日講地」であり、長祿四年までは存在したが、その後、「ナカコマ地下人十二講ト号シテトル」状態になったと考えられる。それを善久は、大乘院尋尊の許可を得て、「再興シテ」取り返し、地藏堂領としてゐた。

それだけではない。善久は前坊主観舜房から引き継いだ田畠の税率を、少しずつ引き上げる作戦も取つてゐた。『当知行納帳』をつぶさに眺めると、②段階以降に次のような記述が散見される。

観舜房代ハ一貫文地子、善久ヨリ一貫百文ナリ、

此地観舜房代ハ百五十文、善久代ヨリ三百五十文ナリ、

此十六間ノ地子観舜房代ハ□□□ナリ善久ノ代ニ二貫

百文ニナスナリ、

こうして②④段階で、善久は観舜房代からの知行地に、合計一貫六百文の増税を果たしてゐた。

⑤⑥段階になると、「観舜房代」と「善久代ヨリ」、「十二

講地」が一括され、表題は「地子の事」と書かれるようになる。収入も、

⑤文亀元年 料足 七貫七三九文・米 六石一斗九升

⑥文亀三年 料足 六貫八二九文・米 六石七斗五升

と、米が増えている。地藏堂領の内わけは、畑地が殆どで、屋敷が数箇所、水田は①段階では二箇所のみだった。しかし⑤⑥では「フチノキ観音堂東」や「南市東ノハシ」、「南市西ノハシ」の三箇所の水田が、新たに加わる。これは、②③④に次の文書が、ほぼ同様の内容で、毎回書かれている事から分かる。

大、フチノキ四セマチ 米一斗ヒヤクカウシエハカル
十合升定

合水田一反ハ、地作一円十一
合升

地子二石 百姓藤石

小、観音堂ノ東ニセマチ

右此水田一反者、ヒラクトキ善秀料足ヲモツテヒラク
田ナリ、シカル間、善秀一期ノ間ハ、知行アルヘシ、
一期ノノチハ、地藏菩薩江永代寄進スルヘキ由、申定
テケ井ヤク、

文明十六年タツノトシヒラクナリ 住持善久

證人寛田房專親

水田一反ハ、七セマチアリ、地作一円

右、南市観音堂北、当方ヘマワリタルセマチナリ、コ

史苑（第五八卷二号）

レモヒラクトキ善秀料足ヲモツテヒラキタル田ナリ、
シカル間、善秀一期ノ間ハ知行アルヘキヨシ、申定候、
善秀一コノノチハ、地藏菩薩江永代寄進申ヘキヨシ、
申定テケ井ヤク状如件、

明応元年子ノトシヒラクモノナリ 住持善久

證人寛田房專親

三箇所の内、後の二箇所は「善秀」という僧が開いたものを、善久と、同じく上北面の寛田房專親が證人として署判している。善秀とは、文明十三年（一四八一）に善久の弟子として出家し、数年後には堂修理の勸進活動に活躍する人物で、この史料は、善秀が文明十六年（一四八四）と明応元年（一四九二）に、南市観音堂近辺に開墾した田の契約状である。^⑩

南市は、現在の奈良市紀寺町辺りにあった市場で、その観音堂周辺の開墾は、文明二年（一四七〇）に『雜事記』で話題となっているが、南市の河骨池の新開は文明十六年（一四八四）に、明応二年（一四九三）には「南市々場自今日田ニ作之、院家弁財天講方ニ為料所」とあり、新開の奉行は上北面寛明房專重、寛田房の息子が勤めている。^⑪ 明応二年（一四九三）六月二十九日条には、

福智院地藏堂事、一期之後者、善春坊主不可有相違候、
先年被仰了、善春住持以後者、又為別当相計其躰候也、

室町期における奈良福智院地藏堂の再興と「勸進憑支」(阿諏訪)

就中門跡弁財天講料所南市新開田在之、其東方一切新開事、地藏堂方御許可候、可有知行候、弁財天講一個月分者可被勤仕候者也、

明応四年四月十五日

花押

善久御房

「其東方一切新開事、地藏堂方御許可候」とあるように、地藏堂は南市の田の新開を許可され、堂領を増やし米を増産していった。

では、この様に徐々に増やしていった堂の財産を、善久はどの様に経営していたか。文明十四年(一四八二)閏七月廿三日では、

福智院地藏堂坊主善久腹氣難儀以外也、可相統躰無之、迷惑之子細申合之間、三郎丸為寛田猶子分可令出家之由仰付之了、堂領并質物等事一大事也、

善久の突然の病に、地藏堂の後継者問題が浮上している。三郎丸を上北面寛田房専親の子供として出家させ、地藏堂の坊主職を継がせることにした。ここで注目すべきは一大事となる堂領と「質物」である。

古代より僧が「仏物・法物」を侵害する「互用の罪」を避けしむるべく、そして寄進者が「永代」と望む法会をつつがなく遂行させるために、堂には「利殖」をすることが許されていた。ここでの「質物」とは、地藏堂で堂領や堂

物を元手にした「利殖」が行われていたことを示すと考えられる。

文明十年七月に地藏堂の修理勸進を始め、同年末に地藏堂坊主に任命されて以来、善久が行ってきたことは、単なる堂の修理とその資金集めではなく、従来の知行地を確認し、増やし、または取り戻し、地子を値上げし新たに開墾をするなど、本来、地藏堂として権利のあった知行を復活させ、広げていく堂の「再興」だった。文明十一年(一四七九)の『雑事記』にある「福智院地藏堂領田畑以下納帳」三十七箇所の記述は、地藏堂の管理者になった善久が、尋尊に対して提出した、堂の再興の権利と決意の表明だったと言えよう。そして「再興」した堂を、今後円滑に経営し、より発展させていく手段として、「利殖」が行われていたのである。

注

- (1) 『福智院家文書』九箱一〇五番「福智院地藏堂修理勸進状」。
- (2) 『看聞御記』の「桂地藏」事件。応永二十三年七月十六日条「此事世ニ披露アリテ。貴賤参詣群集シケル程ニ。錢以下種々物共奉伽如山積テ。造営無程功成ケリ。」に群参で宝物が山と集まったとある。
- (3) 稲葉伸道「中世都市奈良の成立と検断」(『都市の中世』吉川弘文館、一九九二)。
- (4) 『雑事記』文明十一年閏九月二十三日条、明応六年二月十

七日条。

(5) しかし人々は地蔵に対して当然、現世利益も求めた。『看聞御記』応永二十三年七月十六日条「祈請モ則成就シ。殊病者盲目ナト忽眼モ開ケレハ。利生掲焉ナル事都鄙二聞ヘテ。貴賤参詣幾千万ト云」。

(6) 『雜事記』文明十一年正月三十日条。

(7) 『雜事記』文明十六年正月四日条。善久房については、三浦圭一『日本中世賤民史の研究』(部落問題研究所出版部、一九九〇)に「三昧聖の性格を持つ下級僧」とある。

(8) 『福智院家文書』六箱十六号。

(9) 東大史料編纂所レクチ・成實堂古文書一八。

(10) 『福智院家文書』五箱三十番「善久契約状」。

(11) 安田次郎「奈良の南市について」(『中世をひろげる』吉川弘文館、一九九一)。

(12) 『雜事記』明応二年三月二十七日条。

(13) 『雜事記』文明十三年九月十日条。

(14) 笠松宏至「仏物・僧物・人物」(『法と言葉の中世史』平凡社、一九九三)、永村真「莊園の収取体系と領主経済・寺領」(『講座日本莊園史二』吉川弘文館、一九九二)。

二、勸進憑支

各地での勸進活動、堂領の再経営と税率の引上げ、新しい土地の確保とそこからの収入を元にした利殖、これらを元手に蓄えた財力を背景に、新たに一つの「興行」が行わ

れる。それが地蔵堂の上葺のために行われた「勸進憑支」である。ここではこの憑支の構造を考えていく。

1 『憑支引付』とその仕組み

一章で扱った『当知行納帳』の裏には、『憑支引付』(以下「引付」とする)が記されている。^①この記録は、延徳二年(一四九〇)十二月三日から、明応五年(一四九六)十月二十二日までの約五年間に渡る。

『引付』には、紙の左右にそれぞれ一回ずつ「□番取・同時買」の当選者と、その下に一・二人ずつの請人が名を記す(図1)。途中に欠落はあるものの、全部で百八回の開催が記録されている。憑支の目的は「南都福智院地蔵堂上葺勸進」と、左端に版刻で記され、「勸進憑支」である事が分かる。当選者と請人の数を合わせて、およそ百七十余人がこの憑支に参加している。興行は毎月二の付く日に行われるが、十日に一度行われるかと思えば、月に一度のこともあり、定期的とはいえない。

憑支を行う際には、ふつう初めに開催日・規則・懸銭額・取額などを定めた「契約状」を作る。参加者は、一口いくらと決めた懸銭を何部(何口)申し込むか、各自決め、その部数だけ憑支を取る権利を持つ。参加者を「衆中・講衆」

室町期における奈良福智院地藏堂の再興と「勸進憑支」(阿諏訪)

戊十二月三日			
第一番取	本人カイノツカ ヲ山大黒 ウマ	請人三郎五郎	ウメトノ
同時買	カササキ ハヤツル八郎	請人ヒコ三郎	フクチキン
延徳三年正月十二日			
第二番取	中院モチイヤ 六	請人小法師 カタナヤ	西寺林
同時買	カササキ 弥次郎	請人春若 松木チャヤ	ヒシヤモンタウ
南都福智院地藏堂上葺勸進			

図1 『憑支引付』

と言ひ、發起人を「親」と言う。そして憑支の当選金を受け取る際に立てる証人を、「請人」と言った。³現存する中世の憑支契約状は様々だが、最後が罰文で締め括られる「起請文」の形を取り、当選後の懸銭の滞納・放棄が一番の罪惡とされる事は、共通している。早期の当選者によるその後の懸銭未納が、憑支を崩壊させる事を防ぐため、「衆中・

講衆」一同での契約状(起請文)が作られた。

まず、この勸進憑支(以下「地藏堂憑支」とする)の「親」とは誰かを探ってみたい。

延徳二年(一四九〇)十二月三日条には、「兩人合力於福智院在之、三貫取云々」とある。『雜事記』内で唯一、「地藏堂憑支」を示す史料で、ここからこの憑支が三貫文取りで、開催場所は「於福智院」と、地藏堂で行われたことが分かる。憑支の名には、親や地名・目的・金額等を冠するが、この場合は「兩人合力」の「兩人」が、親に当たる。では、「兩人」とは誰を指すのか。『引付』を見ると、地藏堂坊主善久の弟子善秀と、さかに名前を並べる人物に「春辰」がいる。春辰は上北面で、地藏堂に弟を入室させている。「兩人合力」の「兩人」とは、春辰と善秀を指し、「地藏堂憑支」の「親」はこの二人と考えられる。

成實堂文庫の『合力鈔引付』⁵には、幾つかの憑支に関する記述がある。

①延徳二年庚戌

地藏堂憑支最初口春辰奉行百八十文、

②十二月三日地藏堂三十文六部三貫取之

延徳三年十月十二日三貫文取之了至口月末迄無之、

当り最初百八十文ハ春辰引違之

③十二月二十三日絵所 百文二部三貫取之

延徳三年二月十八日三貫取之則本尊 十貫文□□
口之、

この史料は、延徳二年（一四九〇）について記されたもので、それに延徳三年分（一四九一）が追記される形を取っている。

まず③から見てみよう。これと『雜事記』の記事を比較すると、延徳二年（一四九〇）十二月二十三日、「松南院絵所大輔法橋本尊憑支在之由申、二部仰付之」とある。ここから③の「百文二部三貫取之」とは、尋尊がこの日に始まった本尊憑支に、二部（二口）参加した事と分かる。そして延徳三年（一四九一）二月十八日、「大輔法橋仏憑支取之、三貫文、本尊阿ミタ可仰也」とある事から、③の「延徳三年二月十八日三貫取之」は、二月十八日に、三貫文を取ったという意味だと分かる。二つの「取之」が、違う意味で使われている。

では、①②について同様に解釈してみる。①で「地蔵堂憑支」とあり、②の「十二月三日地蔵堂三十文六部三貫取之」部分は、尋尊が延徳二年十二月三日に始まった「地蔵堂憑支」に、一口三十文を六部（六口）参加し、「延徳三年十月十二日三貫文取之」とは、翌年の十月十二日に三貫文を取った、と読める。『引付』の延徳三年十月十二日分には、当選者は「十四番取 エカウロ六部ノ内」と記される。

史苑（第五八卷二号）

尋尊はこの憑支に「エカウロ（絵香呂の意か）」という名で、参加をしていたようだ。

また『合力鈔引付』には、この他に「見塔院憑支」「浄土寺憑支」「専重憑支」「舜恩憑支」「吉田憑支」などが記されている。「地蔵堂憑支」と同時期には、複数の憑支が同時進行していた事が分かる。

2 「憑支衆中」と「当日懸銭」衆

「地蔵堂憑支」は、春辰・善秀の二人を「親」とし、懸銭は一口三十文、三貫文取り、と分かった。しかし開催に際して作成されたはずの「契約状」は、残されていない。

一方、東大寺別院で、興福寺七郷内の新薬師寺に関する『新薬師寺文書』⁽⁶⁾には、憑支の契約状がある（以下「新薬師寺憑支」とする）。そしてその契約状の後には『憑支引付』と同形式の引付が続く。この「新薬師寺憑支」は、享徳三年（一四五四）から寛正三年（一四六二）までの八年間、懸銭二百文で、毎月一度開催されていた。引付部分を見ると、「地蔵堂憑支」と同様、百六十人余りの奈良中の地下人が参加している。

従来憑支は、基本的に憑支衆中（講衆）の間で完結するものと理解されている。衆中は、憑支契約状の起請文に連

室町期における奈良福智院地藏堂の再興と「勸進憑支」(阿諏訪)

署し、毎回の開催に列席し、懸錢をなし、籤等の方法により当選金を取得する。しかし、毎月一度の開催日に、「新薬師寺憑支」の引付部分に載る百六十余人が、一堂に会していたとは考えにくい。

契約状を見てみよう。

敬白 天罰起請文事

条々

右、子細者、於式百文懸憑支仁親・衆分内、各々無等閑儀涯分可被進事、

一 於未來後々テ如此不可有当寺衆分各等閑事、

一 憑支衆分不嫌貴賤親疎、被取当手後、縦雖為天下一

同徳政、不思議事出来、不由已取・未取相共可被懸

懸懃之事、

(中略)

右条々、於違背之躰者、於身可蒙日本国中大小神祇、殊者当寺本尊・十二神将御罰各於身テ、仍起請文之状如件

享徳三年戊申八月廿七日

御堂司	良円房	教願房	学舜房	春道房	了学房
定観房	賢春房	宗賢房	道学房	行願房	道恩房
良覚房	良仙房	良賢房	延行房	良忍房	良謙房

(二名後筆・花押略)

…(以下、引付部分)…

戊申九月八日 安養院

第二番取手八郎古曾 (花押)

十月八日

押上サカツキヤ

タウソシノマエ

第三番取手五良三郎殿(花押) 同買手十郎コソ(花押)

(以下略)

この契約状は、七カ条から成り、最後に十八名の僧が連署をする。内容は、ほぼ全編が懸錢に関するものだが、この契約状自体は、十八名の僧で完結している。

一カ条目では、憑支衆中を「当寺衆分(衆中)」と表し、「不可有各等閑事」と憑支への実直さを求めている。二カ条目では「憑支衆分」と表し、その中で「不嫌貴賤親疎」と定めるが、この「貴賤親疎」は憑支契約状の常套句で、「当寺衆分」は「憑支衆分」と同じ対象を指し、「憑支衆分」とは、契約状の末尾に連署をした十八名の僧に当たる。「新薬師寺憑支」の憑支衆分には、後続の引付部分に載せられる奈良中の地下人百六十余人は、含まれていないのだ。

では、引付部分に載る百六十余人の参加者は、この「新薬師寺憑支」にどのような形で参加した結果、引付に記されるに至ったのか。

「新薬師寺憑支」の引付部分の後に、唯一、次のような起請文が載せられている。

天罰起請文事

右子細者、乙亥正月廿三日享徳四年テンカイタマヤ鶴松コ
せ、当日懸錢慥懸申テ候、若虚言ニ候ハハ当堂御本尊
身ニヲキテ可蒙申候、仍起請文状如件

享徳四年乙亥三月八日アコタマヤ内

これは、転害のタマヤの鶴松ゴゼが、享徳四年（一四五五）
正月廿三日に、「当日懸錢」をした事を、タマヤのアコが証
明した起請文である。鶴松ゴゼは「当日懸錢」、つまりその
時払いの参加をしていた。ここから「新薬師寺憑支」では、
衆中の憑支を元手に、「当日懸錢」が可能な「富籤」が行わ
れた、と考えられる。そして富籤に当選し、金銭を受け取っ
たものが、引付に記される仕組みになっていたのではない
か。

同様に「地藏堂憑支」を見てみよう。『引付』に載る憑支
の参加者は、百七十余人にのぼる。「地藏堂憑支」でもまた、
「憑支衆中」の資金を元に「富籤」が行われており、その結
果が「憑支引付」に記されていた。「憑支衆中」は「親」の
春辰・善秀を含んで構成され、「新薬師寺憑支」と同様の契
約状が作成されていたと考えられる。

『引付』に載せられている「地藏堂憑支」の参加者には、
実に様々な階層が見られる。衆徒国民の古市・小泉や、坊
官の成就院・多聞院、善久等を含めた上下北面衆、御童子・

力者・牛飼、そして一番多いのが奈良中の地下人・商人と
なる。住所の分かる者を地図に落とすと、奈良市内中に散
在する（図2）。地下人のうち、職業の記述があるものには、
質屋、桶屋、鍛冶屋、魚売り、経師屋、刀屋、薬屋、畳屋、
瓦屋、白金屋・赤金屋・ウドン屋等があるが、実際に桶や
うどんを販売していたのではなく、屋号を持った有力商人
とも言う^{8）}。

奈良中に広がる坊官・衆徒から地下人まで、階層を越え
た参加、特に多数の地下人の参加は、地藏堂への「勧進」
の「憑支」と言う理由からに違いない。そしてこの多数の
地下人は、「当日懸錢」衆であり、「憑支衆中」として、「新
薬師寺憑支」契約状に判を据えたような僧とは、別の形で
の参加をしていた。このような広い層を対象としていること
ろに、単なる憑支ではなく「勧進憑支」たる所以があり、
多数の参加者を載せる引付があるのが「勧進憑支」が示す
最大の特徴と言える。衆中の憑支を元手に、対象を幅広く
拡大して籤を売る事によって、「勧進憑支」が成立したので
ある。

『引付』には何箇所か、「毘沙門御ハツシ」や「荒神御ハ
ツシ」という表記が見られる。毎度開催される憑支の籤に
は、はずれ籤も混ぜられていたようだ。また、『引付』の登
録名には、尋尊が「エカウロ」であった他に、「ソコツ太郎」

室町期における奈良福智院地蔵堂の再興と「勸進憑き」(阿諏訪)

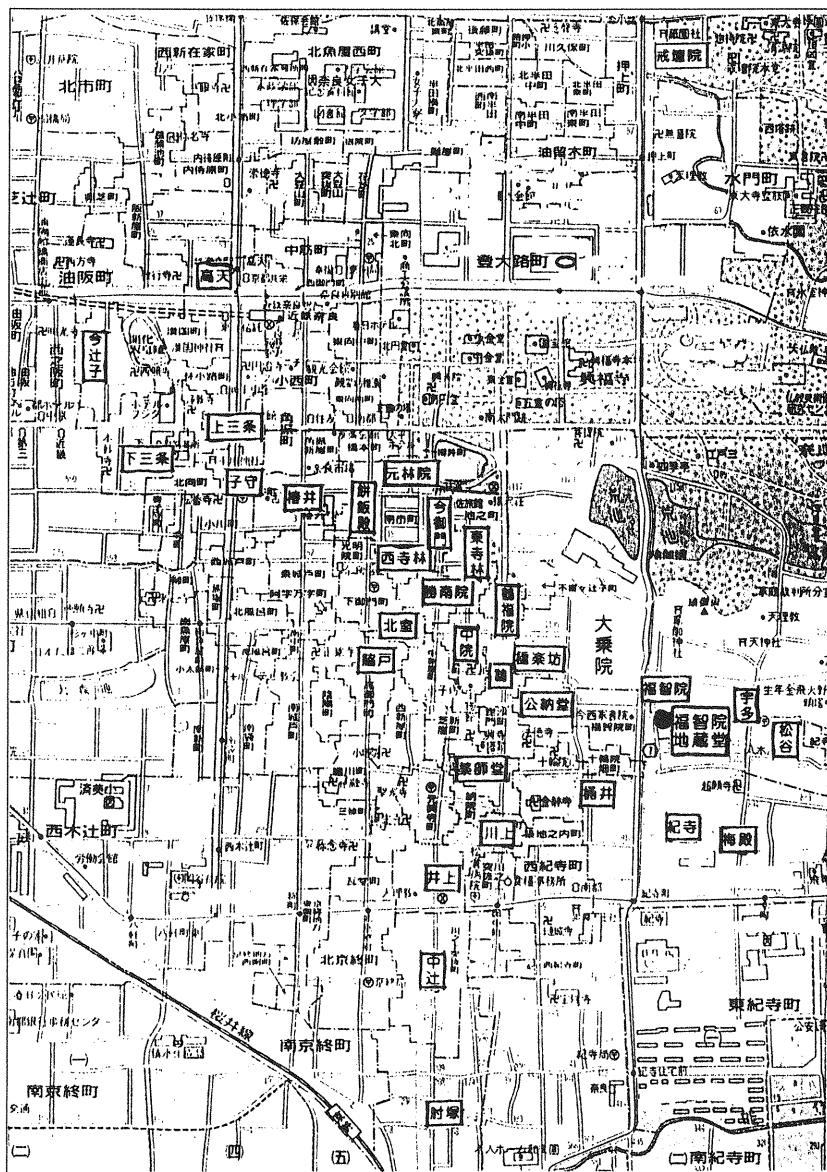


図2 憑支参加者の広がり

1 : 18,000 / 奈良県都市地図 昭文社

や「出三日月」、「福智院辻前ニテ亀相合」、「ハシリ出ルスミノカワ」など、ウィットに富んだものが多い。近世の「富籤」は、札を買った人がそれぞれに好きな文句を書き付けて箱に戻し、それをアトランダムに突き上げ、皆に披露して面白さに興じたと言う。「地藏堂憑支」にも、同様の楽しみがあったようだ。

また『引付』には、奈良中の五軒の茶屋が記載されている。当時の茶屋は常設店舗が多く、民衆の交流の場となっていたが、『雑事記』には、勸進聖が不法を働きいなくなつたので、茶屋に勸進を仰せ付けたり、「龍田之勸進茶屋」と記されるなど、勸進と茶屋の関わりを示す史料が見られる。近世の富籤札の販売は、売出場所は興行開催地の本堂・本坊に限る規定だったが、実際には門前茶屋や市中の富札屋が取り次いでいた、という。中世の奈良でも、茶屋が「勸進憑支」の出先機関となり、憑支籤を販売していたのではないか。

富籤は、近世に入ってから、とくに寺社の修造費用のために盛んに行われるが、中世でも早くからその萌芽があったことが、指摘されている。富籤の名が現れる以前に行われていた（富籤）興行は、寺社内の「勸進憑支」の中に包括されていた事が明らかである。

3 「地藏堂憑支」の憑支衆中

では、「地藏堂憑支」の憑支衆中を構成していたのは、どのような人々か。

『引付』には、奉行の春辰と善秀を含め、春辰 善秀 寛円房（専親） 長信 順願 順円 寛明房（専重） 延專房（良成） 舜恩、の九名の上下北面衆が存在する。このうち、寛明（専重）と舜恩は、先に述べた『合力鈔引付』の中で、「地藏堂憑支」と同時期に、憑支を興行している。

大乘院家に仕える者の給分・職掌を記録した『三箇院家抄』には、「北面方諸行事等」として、北面衆の仕事が挙げられている。注目したいのが、北面衆が「御米納所」「反銭等公物納所」であることだ。北面衆は、検断の上使・人夫の宰領とともに、門跡のところにやってくる年貢・反銭・過銭などを取り立てに行き、それを納める「納所」（蔵方）でもあった。

彼等は、「納所」とすると同時に、尋尊に対しての、金銭の立て替え、貸付も行っていた。明応八年（一四九九）十一月十四日、

妙徳院方門跡借下本利四十貫分、切銭二自明年九年、毎年十貫文宛四个年二可返渡旨、良成請人之間落居申、借書以下色々書状等十八通進返了、并出状如件、

室町期における奈良福智院地藏堂の再興と「勸進憑支」(阿諏訪)

明応八年以前御門跡様御借書以下悉以進上申候、但松林院家任料百二十五貫文事者、一段御許可上者、引米可致彼方催促候、此外者御門跡様直々御借書状取落事候者、重而可致返上候、万一雖申方候、旁以不可有御承引候、此趣可然様洩御披露書仰候、恐々謹言、

十一月十四日

訓英判

延専御房

これは、妙徳院訓英から門跡尋尊がした借金の保証人に、「良成請人之間落居」と、北面衆の延専房良成が立ち、毎年十貫文を延専房が責任をもって訓英に返す事になった、という記事である。

さて、延専房は、公物の納所となる傍ら、それらの収支決済である「算用状」を作り、提出している。明応三年(一四九四)四月三十日、「延専毎月算用上之、二月三月四月分吉野・天川参詣」や、明応七年(一四九八)三月十四日、「良成(延専房)算用状上之、綿兩年分同」等である。

延専房の下に、尋尊への「公物」が納められた後、それは様々な借金返済等の用途に回され、当然この時点で、訓英への借金分も毎年引かれることになる。尋尊の借金は、訓英からのみではない。その他も含めて、当然延専房からの持ち出しで、借金を払うことはあったに違いない。その

肩代わり分と手数料は、延専房の手にのこされたと考えられる。この延専もまた、文龜四年(一五〇四)一月二十五日で、「延専憑支初之」と憑支を行っている。この憑支は、同年の三月に二回、十二月にも一回行われている。

寛円房事親は、文明三年(一四七二)十二月十五日に、「寛円・明恩憑支在之、十二疋分給之了」と、兄弟の明恩とともに憑支を起こし、尋尊も参加している。そして、『到来引付』大乗院文書74番「某書状」は、

今日之御出恐悦存候、就中当寺憑支料足十二貫文分、我々か方へ御借方ニ被下候條忝畏入候、相残分惣合四貫文御座候也、其をハ又今一分御憑支之時可被下之由蒙仰候、畏入候、仍以前よりあつかり申候□れうめんの御絵并御香呂一只今進上申候、大事御物久あつかり候、無相違進上申候條、身二も畏入候、此方二ハ御判之御書一通御座候をハ又四貫弁給候はんする時可進申候、但其をも只今なり共御進にて候者可進申候、返々先日御憑支代被下候條、余身畏入候、如何様以参上御礼可申入由可然預御披露候者所仰候、恐々謹言、

八月十三日

□□(花押)

寛円御房進之候

(文明七年寛円御房人々御中)

尋尊は、浄土寺の憑支で得た「憑支料足十二貫文分」を、

そのまま浄土寺への「御借下方」借金返済に当てているが、書状の宛名が寛円になっている。その理由はつぎの史料から分かる。文明九年（一四七七）十一月二十二日条、

浄土寺憑支十二貫文被召之由注進、剩借下方被立用了、珍重之由仰了、足向菩提山毎月々別内也、寛円方渡之、（以下略）

ここでも尋尊は、浄土寺憑支の十二貫を「剩借下方被立用了」と、借金に回している。そして憑支の懸銭に「足向菩提山毎月々別内也」と、菩提山の毎月の納入銭を当てており、それは「寛円方渡之」とある。浄土寺に対しては、寛円が実際の金銭のやり取り、憑支の懸銭の納入をしていた事が分かる。また『到来引付』の71番「某書状」には、

先度御門跡様へ御借用候鳥目事小五月錢以可被返下由御約束事候へハ、相構々々無相違候者可畏入存由能々御披露候テ可給候、我々も今所用事共候て所望候、万事可然様憑存候、いか様以参入尚々可申入候、恐惶謹言

卯月廿二日

寛円御房

□□（花押）

尋尊へ貸した金銭を、小五月錢の中からどうか確かに返してくれるようにと、寛円に対しての書状がある。この借金 のやり取りも、寛円が仲立ちになっていた。

史苑（第五八卷二号）

寛円の息子である寛明房専重は、延徳三年（一四九一）十月十八日、ちょうど地蔵堂憑支と重なる時期に、「専重合 力初之云々」と、憑支を始めており、『到来引付』のなかで、

文明十一年三月十八日 四百文寛明方 綿シチ

文明十二年八月十日 八百文五文子寛明方

文明十三年十月二十四日 三貫五文子寛明方 シチ堺

へ
など、尋尊に対して、質物や利子を取つての貸付をしている。

法隆寺の記録『嘉元記』には、延慶三年（一三一〇）の惣社明神の造営費用に「寺中公私之藏々、或人々ヲ勸テ、極楽憑支ヲ勸集テ」と、憑支を催している記事がある。そしてその憑支には「寺中公私之藏々」が応じている。法隆寺には、以前より「寺中藏町」という資財や年貢を収納する倉庫の群集する区域があったが、これらは中世後半には、金融機関と化していた。納所として蔵をもち、貸付をする北面衆も「寺中公私之藏々」として、「地蔵堂憑支」の衆中を構成していたと考えられる。

地蔵堂憑支の『引付』で、最も多く当選金を得ているのは「中物方」である。合計十六回取り、その殆どが憑支の終り頃となる。「中物方」の請人は、多く地蔵堂の「親」の春辰・善秀が立っており、『引付』の七十四番取に「中物方

兩人」とある事から、この二人が「中物方」自身と言える。

「中物」とは、現在も使われている経済用語で「ナカモノ」と読み、「中切・中限ともいい、取り引き市場の長期決算取り引きで、翌月末日に受け渡しをする契約のもの」という。北面衆が納所という金融機関であり、「中物方」が憑支親となると、この取分は、北面同志、または他の金融機関、地下人への貸与などの貸借の結果、地蔵堂側に入ってきた利分を指すのではないか。

「新薬師寺憑支」の引付部分の三十六番買手には、

中物方檜松コソ □ヤウホヲキントウキントノ内

とある。「地蔵堂憑支」に限られた言葉ではないようで、奈良での経済的な取り引き用語だった可能性もある。

北面衆は、その活動量・範囲から、寺内の経済活動の実利面を握っていた。彼等が衆中となつて憑支を組み、資金とし、「地蔵堂憑支」の「引付」に載る「当日懸銭」衆なる奈良中の人々が参加した「富籤」を運営し、地蔵堂の上尊資金を調達した。同時に、富籤の売り上げを元に、貸付も行っていたと推測される。上尊資金調達を目的として「憑支」をする事、それを資金として富籤を売る事、売られた籤を買う事、利殖をする事のすべての行為が、地蔵堂に対する「勸進」と言う奉仕活動となり、それらを含めて「勸進憑支」と呼ばれていたのである。

注

- (1) お茶の水図書館・成實堂文庫所蔵。
- (2) 原島陽一「頼母子と無尽」(『講座日本風俗史』八、一九五九)。
- (3) 中田薫「頼母子ノ起源」(『国家学会雑誌』二〇二、一九〇三)。
- (4) 三浦圭一「中世の頼母子について」(『史林』四二一六、一九五九)。
- (5) 東大史料編纂所レクチ・成實堂古文書一〇六。
- (6) 荻野三七彦「中世の頼母子文書二」(『歴史手帳』九一七、一九八一)。
- (7) 新版)には、「伊勢講と同類の自発的な貯蓄団体」とある。
- (8) 『多聞院日記』天文十九年四月二十二日「頼支興行之時ハ不簡縁無縁、不云親疎、種々ニ勸之」とあり、また他の憑支契約状にも同様の表現がある。
- (9) 藤田裕嗣「奈良」(『日本都市史入門Ⅰ空間』東大出版会、一九八九)。
- (10) 原島陽一「近世の富籤」(『講座日本風俗史』六、一九五九)。
- (11) 高橋康夫「茶屋」(『日本都市史入門Ⅲ』東大出版会、一九九〇)。
- (12) 『雑事記』文明八年四月二十六日条。
- (13) 『雑事記』文明十一年十二月二日条。
- (14) (10) に同じ。
- (15) (9) に同じ。
- (16) 池田龍蔵「稿本無尽の実際と学説」(『全国無尽集会所、一九三〇』、『経覚私要抄』の文明九年(一四七七)四月十四日「大安寺資支在之、行通者懸之、頗可與資支也由有其聞」が挙げ

られている。

(16) 安田次郎「にぎわう都市寺院」〔都市の中世〕吉川弘文館、一九九二。

(17) 林屋辰三郎「南北朝時代の法隆寺と東西両郷」〔中世文化の基調〕東大出版会、一九七五。

(18) (17)に同じ。

(19) 日本国語大辞典「中物」の項。

(20) 『福智院家古文書』花園大学福智院家文書研究会一九七九の八九「豊田春賀田皇売券」にもある。

おわりに

奈良の町中に、今も残る福智院地蔵堂の修理は、摺仏札を売り歩く勸進活動を出発点としたが、善久が地蔵堂の坊主に就いてからは、堂に付属の諸施設・堂領の増税、拡大等を含めた「堂の再興」を目的としていった。また、その過程で行われた「勸進憑支」では、地蔵堂の上葺の資金調達のために、興福寺の金銭面の実利を担当する北面衆が、「憑支」した資金を元手に、奈良中の地下人に「富籤」を売った。『憑支引付』に名前の載る人々は、富籤の当選者となる。

「勸進憑支」には、近世の富籤が内包されており、憑支衆中以外の広い諸層を対象としたところに、「勸進」の意味があった。そして憑支を組んだ事、富籤を売った事、籤札を買った事、貸付をした事、これらすべての行為が「勸進憑

支」に当たる。

福智院地蔵堂にとつて、この「勸進憑支」は、一連の「堂の再興」事業の中で、また後の「堂の経営」への移行の中で、堂の知名度を上げ、威力と信頼を増すきっかけになつたと考えられる。

しかし、いまだ「地蔵堂憑支」で「□番取・同時買」とされ、『新薬師寺憑支』で「取人・買人」と表される当選者の違い、当選者と「請人」の関係に付いて等、憑支の構造全般については、須臾に答えは出てこない。

憑支衆中を構成していた北面衆が、興福寺内で果たす役割や、寺内の租税・経済の動き、貸付などを軸にする寺内の組織と寺外との関わり等と共に、勸進活動や憑支を考えることを、今後の課題としていきたい。

注

(1) 小五月銭については、別稿予定。

△付記 本稿執筆にあたり、多大なご指導を頂いた酒井紀美氏に末筆ながら、あつく御礼申し上げます▽

(立教大学文学研究科史学専攻博士課程後期)